

# 栄山江流域の最近の考古学的調査の 成果について

金 容 民（韓国国立扶餘文化財研究所）

（崔 英姫（韓国国立江陵原州大学校）・佐川 正敏（東北学院大学）共訳）

## 1. はじめに

韓国の栄山江流域における古代社会の実態を解明するため、今まで多角的な調査と研究が行われてきた。従来の研究は、巨大な墳丘からなる全羅南道羅州市にある潘南（バンナム）古墳群の造営集団の性格に関する問題に集中してきた。とくに、栄山江流域で確認された独特の文化要素である大型甕棺を埋葬施設として使用した古墳の築造集団や性格が、論議の中心であった。

初期には、栄山江流域古墳の発掘調査を遂行した日本研究者を中心に、墳丘の一部の特徴と遺物を日本の場合と比較して、栄山江流域の古墳を「倭人の墓」と理解する意見があった（朝鮮総督府 1920、有光教一 1940）。しかし、この問題について韓国人による発掘調査が本格的に行われ、百済という大きな枠のなかで論議されながらも、「甕棺古墳」を「馬韓」と結び付けようとする論議が台頭していた（李榮文 1974、成洛俊 1983）。さらに、甕棺古墳が馬韓の墓制である認識が一層強くなりつつ、百済とは異なる独立的な政治集団の墓とする見解も登場した（崔夢龍 1987・1988、林永珍 1997）。それとともに、馬韓という歴史的用語を使わず、「甕棺古墳社会」という用語を作ることによって、独自性をより強調する論議も提起された（姜鳳龍 1998）。

栄山江流域に甕棺古墳を築造した社会を、百済とは異なる独自の政治集団と規定しながらも、その内部の社会構造を分析し始めたのは、最近のことである（成洛俊 1996、李正鎬 1999、李暎澈 2001、金洛中 2009）。それにも関わらず、栄山江流域の百済併合の時期についても論争が続いている。

最近になって、全羅南道高興郡の雁洞（アドン）古墳（林永珍 2011）、新安郡のペノル里古墳（李正鎬 1999）など、栄山江流域に前方後円形古墳が登場する以前の倭系要素をもつ墓が発見されている。とくに、栄山江流域の中心地域に位置する霊岩県の沃野里（オッヤリ）方台形古墳（国立羅州文化財研究所 2012）もその1つとして、伽耶と倭系の要素が確認された。これらの遺跡の発見を通して、栄山江流域の在地集団は、すでに伽耶と倭をはじめとする外部世界との文化的接触を持続的に推進してきたことがわかる。この

ような現状は、4世紀代の日本列島において栄山江流域の遺物がしばしば出土していることから確認できる。

本文では、最近の栄山江流域における調査および研究の成果を中心として簡単に紹介し、これからの研究方向について考えてみたい。

## 2. 栄山江流域の最近の調査成果

### (1) 羅州・伏岩里遺跡の発掘調査

羅州・伏岩里（ボガムニ）遺跡の発掘調査（国立羅州文化財研究所 2010・2011a）は、全羅南道羅州市多待面伏岩里 874-7 番地一帯に対する発掘調査として、伏岩里古墳群（史跡第 404 号）とその築造勢力の性格を解明し、栄山江流域の古代文化の性格を解明するための基礎資料を確保することを目的として、2006 年から国立羅州文化財研究所が推進してきた（図 1）。

羅州・伏岩里古墳群は、1995 年と 1996 年に全南大学校博物館によって調査が遂行されたことで確認された。当時には 1、2 号墳の間に位置する甕棺墓と周溝、1 号墳の石室などが検出された。その後、1996 年～1998 年に国立文化財研究所と全南大学校博物館によって伏岩里 3 号墳で全面的な調査が遂行された。調査の結果、甕棺墓、石槨墓、石室墳などの 41 基の多様な埋葬遺構と金銅製履（靴）、銀製冠飾、裝飾太刀などの多種多様な遺物が確認された。そのような成果を通して、栄山江流域の甕棺古墳社会が約 400 年にわたって固有の多葬伝統を維持しつつも、石室墳または石槨墓の新しい墓制や外来文物の受容によって変化してい



図 1. 羅州・伏岩里遺跡全景（国立羅州文化財研究所 2010）

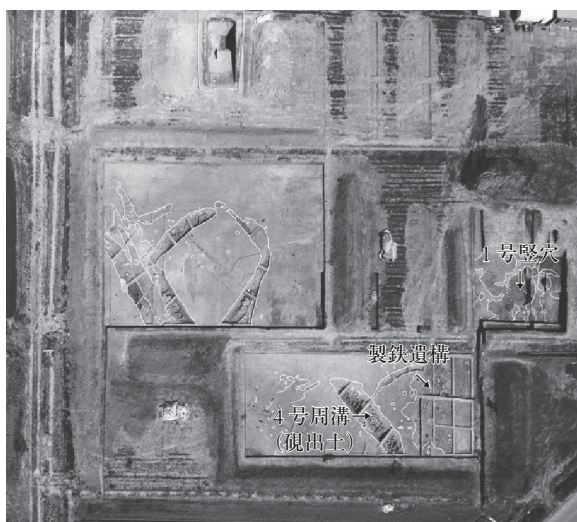


図 2. 伏岩里遺跡の周溝全景（国立羅州文化財研究所 2011a）

く過程が良く理解できるようになった。とくに、伏岩里3号墳・96石室墓(5世紀後葉～6世紀前葉)の場合、石室墳の内部に4基の甕棺を安置したことは、土着甕棺墓の伝統を継続しながらも、外来要素である石室墳を受容したことを、そして5号横穴式石室墓からは百済中央の政治的影響を意味する銀製冠飾が出土し、6世紀中葉頃の百済泗泚期の中央と地方との関係をよく示している。

羅州・伏岩里古墳群の周辺地域(伏岩里遺跡)に対する発掘調査は、古墳の周辺で集落を確認して、伏岩里古墳群の築造勢力の性格を解明するための

調査として開始されたが、2006年～2010年の調査では古墳の周溝4基、溝状遺構1基、炉跡3期、竪穴遺構10基等が確認された(図2)。とくに、竪穴遺構の内部からは百済の木簡を始めとする銘文土器、鉄滓などが出土した(図3)。また、既存の伏岩里古墳群周辺からも新たに周溝のみ残った遺構だが、甕棺墓と一緒に発見された。この古墳は、台形墳丘墓として伏岩里古墳群の造成時期(3世紀中葉～7世紀前葉)の中でも4世紀から5世紀頃に該当するものとして理解された。とくに、4号周溝(図2)で出土した円筒形土器は、伏岩里2号墳下層から出土した円筒形土器と器形や大きさなどが類似するので、同じ時期に存在した古墳と推定された。そして、伏岩里古墳群一帯には多数の台形墳が存在したと見られ、方向に関わらず空間を積極的に活用していたと推定された。また、4号周溝の埋土や遺物出土の様相から見ると、墳丘の水平あるいは垂直方向に拡張が行われたことが推定できる。以上のような調査結果は、伏岩里古墳群の分布範囲と時期によって墳丘造成と立地が変化した過程を研究する際に、貴重な資料として評価される。

また、4号周溝の南東部からは製鉄遺構と竪穴遺構が確認され、古墳群の外側に鉄生産遺跡が存在したと判断される(図2)。とくに、高温で形成された鉄滓と炉壁体などが確認され、精錬・鍛冶遺構と推定される。これは、湖南地方(全羅南・北道の総称)で従来確実な製鉄遺構が確認されなかった古代製鉄関連の研究に対して、新たな転機をもたらしてくれた。

また、何よりも重大な成果は、百済の一地方からはじめて木簡が出土したことである(1号竪穴: 図3)。木簡として分類された計65点の中の13点からは墨書が確認され、太極文様が描かれた木製品も2点出土した(図4)。国内で確認された木簡の中で最大で最長



図3. 伏岩里遺跡の竪穴遺構全景(国立羅州文化財研究所2010)

の木簡と、最初の封緘木簡、村落文書の木簡などの多様な形態と内容を含んでおり、6～7世紀の榮山江流域を中心とする韓国古代史研究にとって非常に重要な資料として評価される。

最後に、「官内用」、「豆脰舎」銘の銘文土器と硯、百濟瓦片などが出土し、古墳群の周辺に百濟の地方官庁が設置され、文書行政が行われていたことを確認することができた。とくに「豆



図4. 伏岩里遺跡出土木簡（国立羅州文化財研究所 2010）

脰」は、百濟末期の榮山江流域の地方行政の中心治所である豆脰県が、伏岩里一帯に存在したことを示す。すなわち、木簡の内容や他の出土遺物から見ると、6世紀中葉から羅州・伏岩里一帯は百濟中央との密接な関係の中で地方行政の中心地として機能していたことが推定できる。

## (2) 靈岩・沃野里方台形古墳の発掘調査

靈岩・沃野里「方台」形古墳（第1号墳：「方台」は韓国の古楽器を支える角錐台形の器具）は、沃野里の長洞集落の後方、海拔15m内外の低い丘の頂上に立地する（写真5：国立羅州文化財研究所 2012a）。靈岩地域には、内洞里（ネドンリ）古墳群、沃野里（オッヤリ）古墳群、萬樹里（マンスリ）古墳群、臥牛里（ワウリ）甕棺墓、内洞里双墳、新燕里（シンヨンリ）古墳群、ジャラボン古墳など、49群187基の古墳が散在し、古代社会においては政治的に中心的な位置を占めていた。この中で靈岩・沃野里方台形古墳は、墳丘の規模が約30mの大型であるだけでなく、単独で存在しており、以前から古墳の正確な規模や形態、そして構造に関する疑問があった。

そこで、古墳周囲の毀損を防止し、古墳の性格を明かにして、整備および復元の基礎資料を確保する目的で、2009年～2011年にかけて発掘

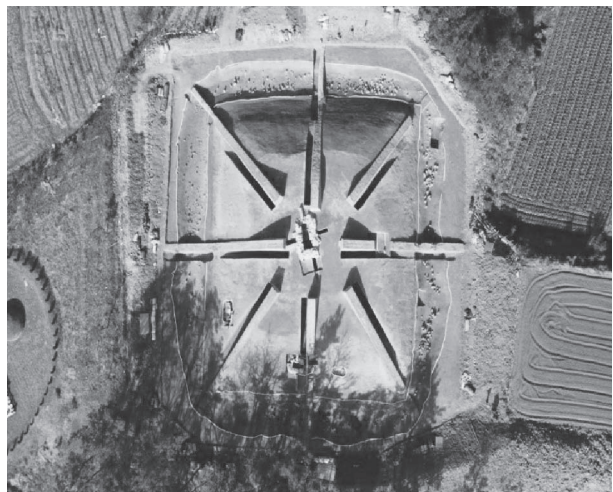


図5. 靈岩・沃野里方台形古墳の全景（国立羅州文化財研究所 2012a）

調査が実施された。

調査の結果、霊岩・沃野里方台形古墳は栄山江流域ですでに調査された古墳と比べて、クモの巣状の分割盛土技法や墳丘とともに構築された墓坑の存在を通して、石室の同時築造、そして石室壁面の木柱設置などの独特な特徴を見せている(図6、7)。何よりも、栄山江流域の古代社会において周辺地域との文化交流の様相を探究できる重要な位置を占めている。

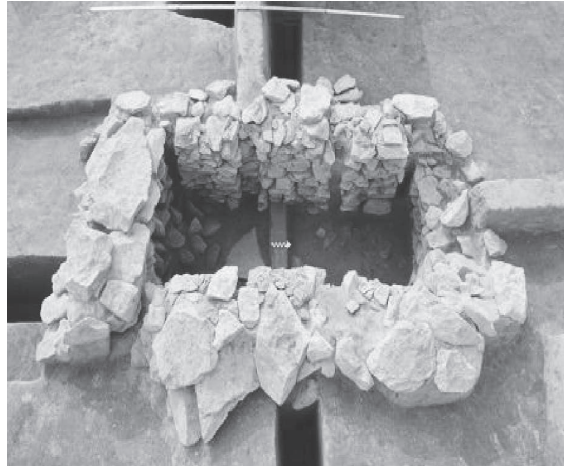


図6. 霊岩・沃野里方台形古墳の石室墓全景(国立羅州文化財研究所 2012a)

### (3) 羅州・五良洞窯跡の発掘調査

羅州五良洞(オリヤンドン)窯跡(史跡第456号)は、2001年に東新大学校文化博物館によって発掘調査されて以後、栄山江流域の三国時代の大型甕棺生産集団の研究において重要な遺跡として評価されてきた。しかし、発掘調査が一部地域に制限されたため、この遺跡が大型甕棺を専用に焼成した窯なのか、それとも土器窯なのかに関する学術的究明が長らく提起されてきた。したがって、羅州・五良洞窯跡の性格究明と栄山江流域における古代勢力の生産および流通過程の復元に必要な基礎資料を確保する目的で、2007年から中・長期調査の計画を立て、年次的な発掘調査を進められている(国立羅州文化財研究所 2011b)。



図7. 霊岩・沃野里方台形古墳の第1号甕棺墓(国立羅州文化財研究所 2012a)

2011年まで5次わたる発掘調査の結果、窯33基、窯廃棄場1基、作業場1基と墳墓遺跡10基が確認された(図8)。この中で窯8基と廃棄場、作業場、墳墓遺構10基、竪穴・溝状遺構などの25基に対して発掘調査が行われ、多量の甕棺

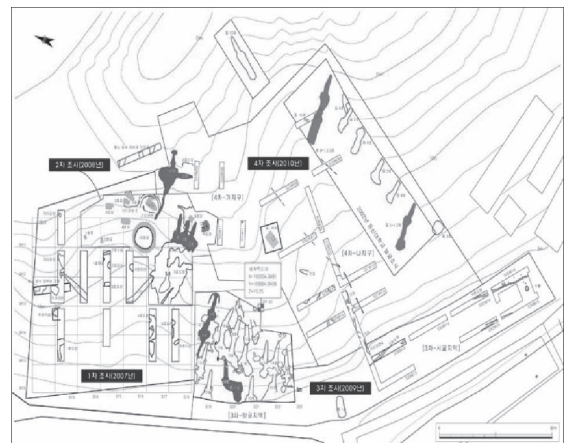


図8. 羅州・五良洞窯跡遺構配置図(国立羅州文化財研究所 2011b)

片と土器片などの遺物が出土した。その結果、窯は栄山江流域に甕棺墓が盛行した時期に大型甕棺を焼成した窯跡であることが確認された(図9)。とくに、5号窯の灰原から全体の1/3程を残した状態で大型甕棺の破片が出土し、大型甕棺の焼成に利用された窯であることをより具体的に明らかにする資料が確保された。これまでの調査結果から見ると、この遺跡の一带に5世紀から6世紀初頭にかけて大規模な大型甕棺生産集団が存在したと判断される。また、窯を一部破壊して造成された墳墓は、6世紀中葉以後の年代に該当するので、窯の操業時期はそれ以前であったことがわかる。



図9. 羅州・五良洞窯跡1~3号窯跡全景(国立羅州文化財研究所2011b)

### 3. 栄山江流域の古墳の特性と甕棺墓

#### (1) 栄山江流域の古墳についての諸見解

栄山江流域で甕棺古墳を構築した社会が百済に編入された時期については、これまでは『日本書紀』神功紀の記録に基づいて、4世紀後半の百済近肖古王代であると推定されてきた(李丙燾1970、李基東1987、盧重国1987)。しかし、栄山江流域では4世紀後半以後に甕棺古墳の造りが続き、その規模がむしろ大きくなるなど、より発展する様相が確認された。それによって、栄山江流域が百済に編入された時期についていろいろな説が提起されただけでなく、甕棺古墳を築造した勢力についても馬韓諸小国の支配層であるとか(成洛俊1983)、さらに5世紀末まで栄山江流域は百済の直接支配を受けなかったという見解(李道学1995)も提起された。甕棺古墳社会の性格については、古代複合社会(崔盛洛1996)や、政治的統合が達成された段階(朴淳発2000)として考える意見がある一方、甲冑や武器類が見られないことから、武力的な要素が弱く、統合の程度も低かったという意見も提起された(表2: 金洛中2009)。

そして、栄山江流域が百済と対立する独立的政治勢力として存在したかについても、いろいろな意見が提起された。栄山江流域が百済に征服された以後も、百済が全領域に対して統一された支配網を構築することが困難であったとする見解があり(李基東1996)、栄山江流域の甕棺墓を馬韓の盟主国である目支国の首長墓であるという見解も提起された(崔夢龍1986)。また、百済の影響圏外で独自の政治集団に成長した馬韓勢力として、百済が懐柔の目的で提供した金銅製冠、金銅製靴などの威信財が出土した地域は、百済の直

表1. 栄山江流域の古墳の変遷（林永珍 案：林永珍 2011）

区分	紀元前後~2C 末	2C 末~4 中葉	4C 中葉~5C 末	5C 末~6C 初め
方形木棺墳丘墓	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■			
台形木棺墳丘墓		■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■		
(長) 方形木棺墳丘墓			■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
円(台)形石室墳丘墓 鼓形石室墳丘墓				■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
墳丘規模	低墳丘(低墳丘墓)	中墳丘(墳丘古墳)	高墳丘(墳丘高塚)	高墳丘(墳丘高塚)
墳丘形態	方形	台形	(長) 方台形	円(台)形
中心埋葬主体	木棺	木棺	専用甕棺	石室
埋葬方式	単葬-多葬	多葬(水平的)	多葬(垂直的)	合葬
祭祀(周溝内)	未詳	小規模	盛行	衰退
分布の特徴	多地域に散在	多核中心圏	多核階層化	多核階層化の弛緩
社会統合度	(小国) 分立	圏域別統合 (圏域別中心地)	流域別統合 (大中心地の登場)	統合弛緩 (圏域別部中心)
変遷の背景	墳丘墓の波及	百済の建国と 併合による 圏域別結集	百済の併合による 栄山江流域圏の 統合対応	百済の泗泚遷都に 連係された併合

表2. 栄山江流域の古墳の変遷（金洛中 案：金洛中 2009）

墓制/時期	250	300	400	500	600	
埋葬施設	木棺	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
	甕棺	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
	石室	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
代表的な墳形	台形			円台形 方台形	前方後円形 円形 方台形 円形 半球形	
墳丘規模	高	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
中	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
低	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
墓制の特徴	木棺 1・2 型式の甕棺 複合台形墳 I・II 型式 台形・多円形甕棺	木棺(郭) 3A 型式甕棺の出現 複合台形墳 III 型式 墳丘の円形・方形化	3B 型式 甕棺の盛行	3B 型式 甕棺の存続 I 型式横穴 式石室	II・III 型式横穴式石室 の流行 銀製冠飾 装飾大刀	
副葬品	土器	I~II 期 汎馬韓様式(円底短肩 壺、二重口縁壺など)	III~IV 期 栄山江流域様式の成立	V 期 栄山江流域 様式の盛行	VI 期 栄山江流域 様式の絶頂	VII~VIII 期 百済様式への転換および一元化
	金属製品	1 期 小型農具、鉄釘、環頭大刀を始めとする小型の武器	2 期 武器類の増加 装飾性威信財	3 期 副葬品種類の急増 装飾馬具類の登場	4 期 副葬品が減少し、百済の官位制と関連する銀製冠飾など身分表象品、植材類の出土	
段階	複合台形墳 複合台形墳 1 (木棺中心)		複合台形墳 2 (木棺甕棺並立)	高塚 甕棺墳 (高塚)	初期 石室墳	百済式石室墳

接統治が困難な独自の勢力であったという見解もある（表1：林永珍 1997、2010、2011）。

また、甕棺古墳の高塚化、円筒形土器の使用、副葬遺物の変化とともに前方後円形墳の登場は、栄山江流域の甕棺古墳社会と百済との関係を探究する際に、重要な要素として認めることができる（李正鎬 2012）。とくに、栄山江流域で新たに登場した前方後円形墳と初期の横穴式石室については、様々な見解が提起されてきた（図10）。前方後円形墳の出自については、移民説、倭系百済官僚説、在地集団説に大きく分けられる。

移民説は、栄山江流域の集団が日本の九州地域に移住した後、帰郷、婚姻、または亡命によって栄山江流域に再移住した際に、前方後円形墳を築造したという説である（林永珍 1997a、2002、2005）。

このような側面から、栄山江流域が『宋書』倭国伝の慕韓地域に当たると想定し、5世紀後半に日本列島内外の変革によって九州の諸勢力が栄山江流域へ大挙移住した後、前方後円形墳を作ったという説もある（東潮 1995、2001）。一方、栄山江流域の前方後円形墳が、横穴式石室、立地、墳形、墳丘祭祀、羨道および墓道の遺物副葬などにおいて、日本の九州地方の埋葬方式と類似することから、栄山江流域に定住しながらも百済中央政府の支配を受けた倭人によって築造されたと考える見解もある（洪漣植 2005）。また、日本の近畿地方で栄山江流域と関連する遺物が出土することから、近畿地方へ移住した馬韓人が東城王の帰国とともに帰郷し、栄山江流域へ配置されて前方後円形墳を築造したという見解も提起された（徐賢珠 2007）。

一方で倭系百済官僚説は、栄山江流域が4世紀後半以来、百済に服属したので、前方後

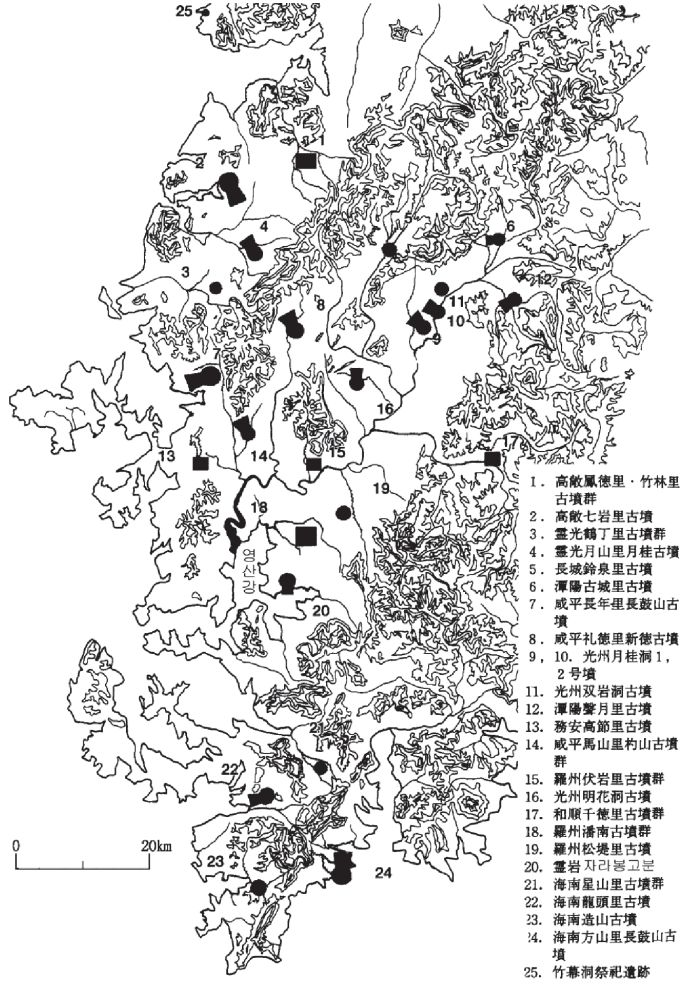


図10. 栄山江流域の前方後円形墳の分布図（金洛中 2009）



円形墳を築造した勢力が、栄山江流域の土着勢力を牽制するために、百済の中央政府から派遣された倭系百済官僚であったと見る説である（朱甫暎 2000）。このような脈絡によって、栄山江流域における前方後円形墳の偏在性、散在性、非継続性、短期性から見た場合、前方後円形墳の築造勢力が栄山江流域に対する領有化政策の一環として倭国から移住した倭系百済官僚であったという見解も提起された（山尾幸久 2001）。また、以上の見解をさらに発展させ、栄山江流域の前方後円形墳は周辺の在地首長とは関係なく突然出現したので、その築造勢力が北部九州から有明海沿岸にかけて存在した複数の有力豪族であったと考える見解も提起された（朴天秀 2006）。とくに、前方後円形墳は百済熊津期後半に限定して築造されたこと、孤立して分散配置されたこと、そして百済の威信財が副葬されたことから、前方後円形墳を築造した勢力が百済王権と倭王権の両者に属したまま土着勢力を牽制し、対倭外交および大伽耶攻略のため、百済から一時的に派遣された倭系百済官僚として見た（朴天秀 2006）。

一方、栄山江流域の在地勢力が、すでに4世紀後半から九州との交流を通じて前方後円形墳を墓制として導入した、という在地説もいろいろと提起されてきた（小栗明彦 2000）。また、6世紀まで百済領域に編入されず、百済、倭、伽耶と均等に関係をもちつつ、倭との交流を通じて前方後円形墳を造営したという説もある（岡内三眞 1996）。そして、百済に服属せず独自性を維持していた在地勢力が、5世紀後半～6世紀前半に九州地域との交流を通じて、墓制を導入したという説も提起された（土生田純之 1996、2000）。栄山江流域の前方後円形墳は、百済-栄山江流域-九州勢力-倭王権を繋ぐ対外関係ネットワークが、百済-大和王権という双方向的な構造として再編される過程で生じた栄山江流域の在地首長層の一時的な活動の産物だとする見解もある（朴淳発 1998、2000）。また、5世紀後半に九州系の石室が日本列島の東海地方以西の各地域に伝播する過程のように、栄山江流域の前方後円形墳の築造勢力も在地首長として捉える見解（柳澤一男 2001）や、栄山江流域の在地首長層が当時の社会的変化に積極的に対処するための努力として前方後円形墳を築造したという説もある（崔盛洛 2010）。前方後円形墳は、漢城（百済の最初の首都）の陥落で百済の影響力が弱くなったことにより、栄山江流域の集団が百済、伽耶、倭の情勢変化に対応して勢力を伸ばし、倭との交流過程で日本列島内の特定集団と相互関係を強調するための象徴として、各地から取捨選択しながら築造したという説もある（金洛中 2009）。

しかし、栄山江流域の墓制変化様相について従来と異なる視点を与えてくれる資料が、つぎつぎ発見されている。栄山江流域で甕棺墓がもっとも発達した段階でも、古墳中心の墓制に甕棺墓とともに、木棺あるいは木槨墓が共存する様相（霊岩・新燕里古墳群4号墳、霊岩・沃野里方台形古墳など）が確認されている。さらに、栄山江流域の甕棺墓の中心圏から離れた地域では、非常に独特な墓制が現れる。海南郡の万義塚1号墳からは百済、新羅、伽耶、倭系の遺物が副葬された石槨墓が築造され、万義塚3号墳からは百済様式の横

口式石室が築造された。このような点から見て、栄山江流域の甕棺古墳の中心地域でも甕棺古墳が統一的な墓制として完全に確立できず、周辺地域では甕棺墓とまた異なる墓制が登場する。また、新村里9号墳、徳山里4号墳を含む潘南古墳群の築造時期を5世紀後葉～6世紀前半頃と考える見解も提起された（徐賢珠 2007、吳東墀 2009）。これらの見解によれば、栄山江流域で甕棺古墳が定形化し、高塚化しつつ、中心的墓制として定着した時期は、栄山江流域に新たな墓制が登場した以後であると見られる。そして、霊岩・沃野里方台形古墳には墳丘の中央に横口式石室を作り、墳頂部に円筒形土器を立て並べた様相が現れたが、その墳丘には在地的な甕棺墓も共存する様相が現れた。さらに、墳丘や石室の築造方法を含めて、出土遺物からも百済、伽耶、倭と関連づけることができる要素が確認された。

以上のような最近の調査において、栄山江流域の在地的な要素とともに、百済、新羅、伽耶、倭などの周辺地域と関連する様々な要素が時間差をおいて現れたり、または一緒に現れる様相が確認されている。このような様相をどう解析すべきかについては、これからより細かな検討が必要であろう。ただし、他の地域と違って栄山江流域が、墓制に関してはかなり開放的な環境であったことは確かなようである（李正鎬 2012）。

## (2) 栄山江流域における甕棺墓の変遷過程

甕棺墓とは、日常用の土器や棺としてだけ使う目的で製作された大きな甕の中に遺体を安置したり、骨を入れておく墓のことをいう。韓半島では新石器時代に始めて現れ、朝鮮時代の幼児葬に至るまで長い間使用されてきた埋葬風習である。とくに、栄山江流域では3世紀頃から専用甕棺を使用した独特な甕棺古墳文化が、多葬の伝統とともに発達し、他の地域との違いを見せている（図11～13）。

栄山江流域における甕棺墓は、今までの研究結果によると、甕棺の形態や埋葬方式などから、黎明期（鉄器時代～2世紀頃）- 発生期（3世紀頃）- 発展期（4世紀頃）- 盛行期（5世紀頃）- 衰退期（6世紀半ば頃）という5段階に変化している（図14）。栄山江流域の初期（黎明期）の甕棺墓は、中心的墓制である周溝を備えた土壙墓に付け足されたり、付属的な墓として使用された（図15）。

栄山江流域では紀元後3世紀代（発生期）に入ると、日常用ではなく、墓だけにもっぱら使用するための専用甕棺が登場する（図16）。初期の専用甕棺は、口縁部がラッパのように広がり、頸部が狭く、胴部がまた広がるというように、部位ごとの屈曲がかなり大きい特徴がある。

紀元後4世紀代（発展期）には、栄山江流域の台形墳の墳丘で甕棺墓が木棺墓とともに中心的な



図11. 光州・新昌洞遺跡出土の甕棺墓（国立羅州文化財研究所 2012b）

埋葬施設として確立し、甕棺の形態も外反する口縁部と突起がついた底部をもつ（図17）。とくに、甕棺が中心的な埋葬施設になり、墳丘が水平に拡張されて大型化する傾向を帯びる。

甕棺古墳が全盛期を迎えた紀元後5世紀代（盛行期）には、栄山江流域固有の地域色を帯びた全長2mもあるU字型の専用甕棺が中心的埋蔵主体施設として使用された（図18）。羅州・潘南地域を中心に、墳丘が水平・垂直へ拡張しながら大型化した。また、もっとも典型的なU字形甕棺が中心埋葬施設である新村里9号墳からは、金銅製冠、金銅製履（靴）、装飾太刀などの威勢品が出土し、当時の甕棺古墳の築造勢力の政治的位相が推測できる（図13）。

6世紀（衰退期）になると、栄山江流域に百済の地方支配体制が整備され、百済の領域に編入された。この過程で甕棺古墳は、古墳の中心的な埋葬施設の位置を石室墳に譲り渡す。また、甕棺の形態も典型的なU字型から変形された形態が登場した（図19）。

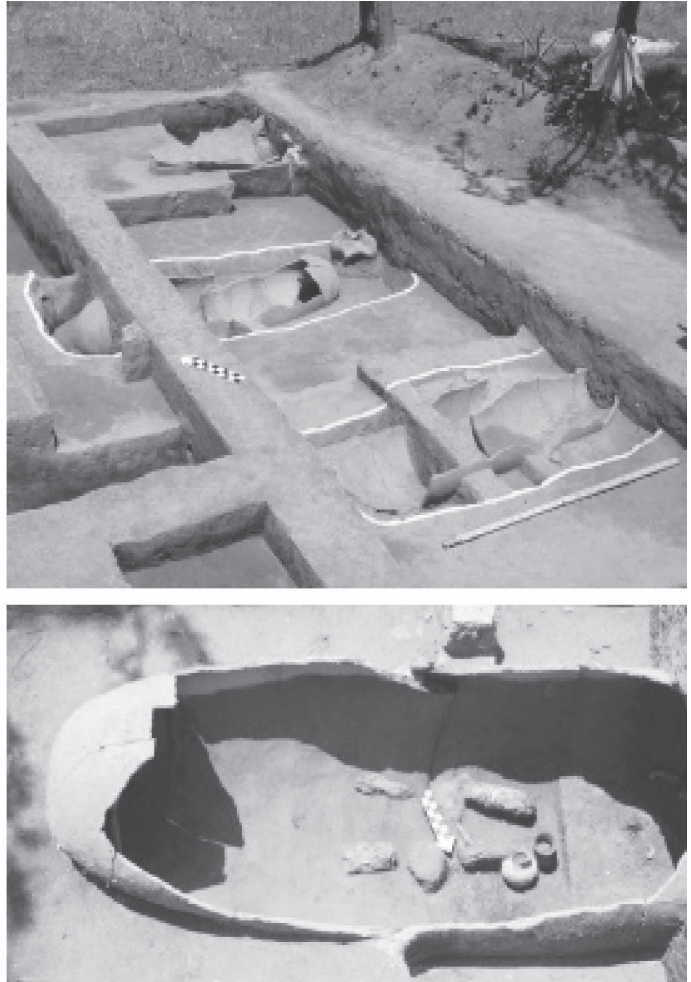


図12. 羅州・大安里バンドゥ古墳の甕棺墓（国立羅州文化財研究所2012b）

#### 4. 大型甕棺の製作技法の復元

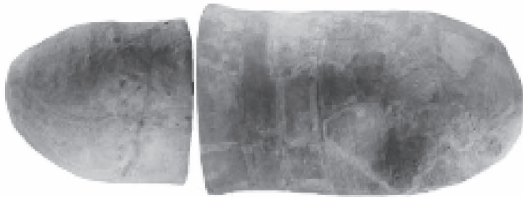
栄山江流域の甕棺墓は、大型化、地上化されるなど、他の地域とは区別される独特な埋葬風習と変化の過程を見せ、百済とは異なる独自の勢力の文化として理解されている。しかし、ほとんどの研究は甕棺文化に対する政治社会的論議を中心に進められており、生産遺跡や甕棺の製作技術などの調査・研究の成果に基づく、より細密な当時の社会文化への



▲新村里9号墳の甲・乙・丙棺の出土状況



▲新村里9号墳の乙棺から金銅製冠、金銅製履（靴）、装身具などの各種の遺物が大量に出土



◀新村里9号乙棺の主棺と副棺



▲金銅製冠



▲金銅製履（靴）



▲環頭太刀



▲鉄製刀子ほか



▲金銅製装身具ほか



▲ガラス玉

図13. 新村里9号墳の甲・乙・丙甕棺墓および出土遺物（国立羅州文化財研究所2012b）

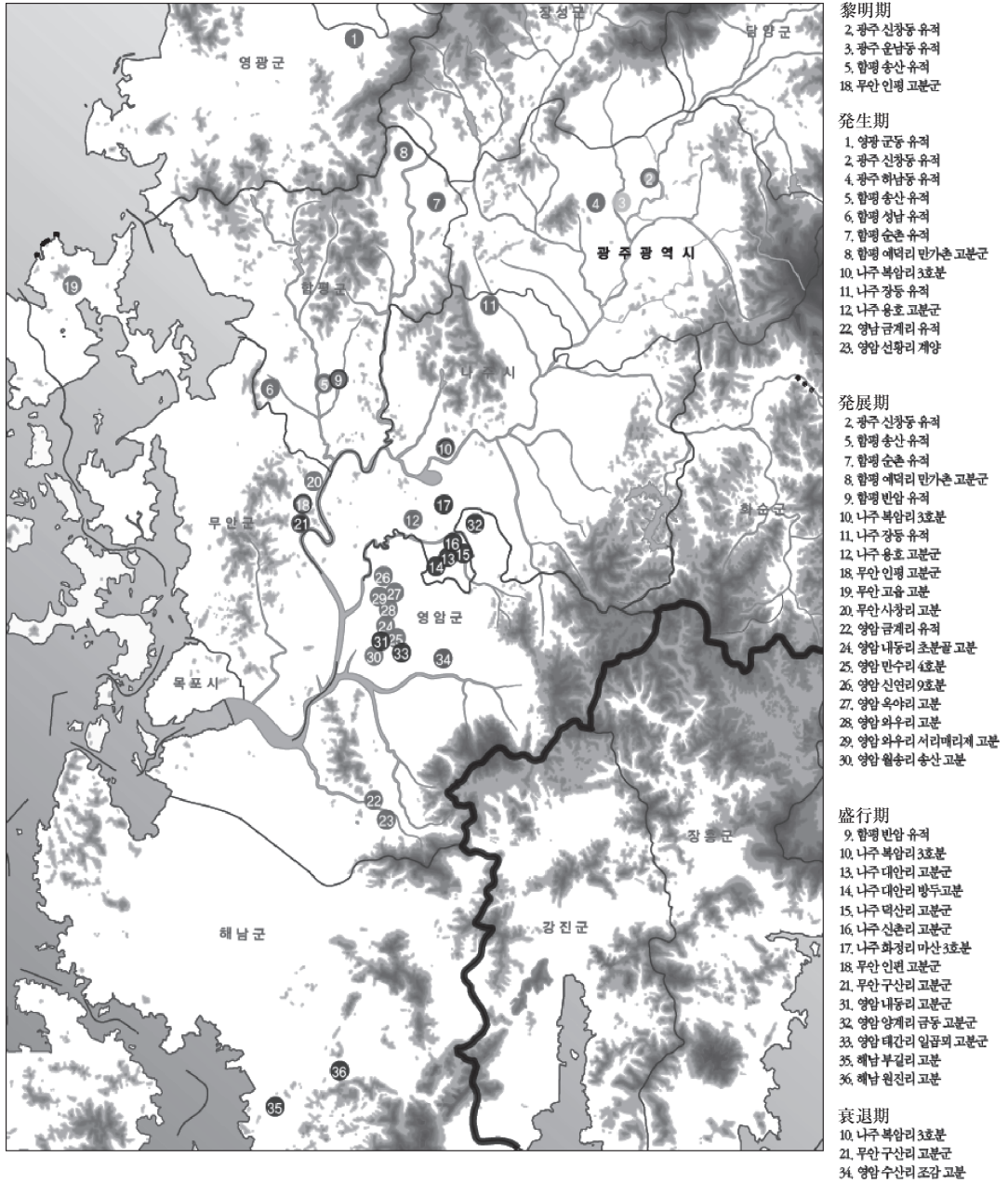


图 14. 榮山江流域における甕棺変遷時期ごとの甕棺墓遺跡の分布図 (国立羅州文化財研究所 2012b)



図 15. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「黎明期」の甕棺（国立羅州文化財研究所 2012b）



▲直口壺



▲丸底壺

図 16. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「発生期」の甕棺と副葬土器（国立羅州文化財研究所 2012b）

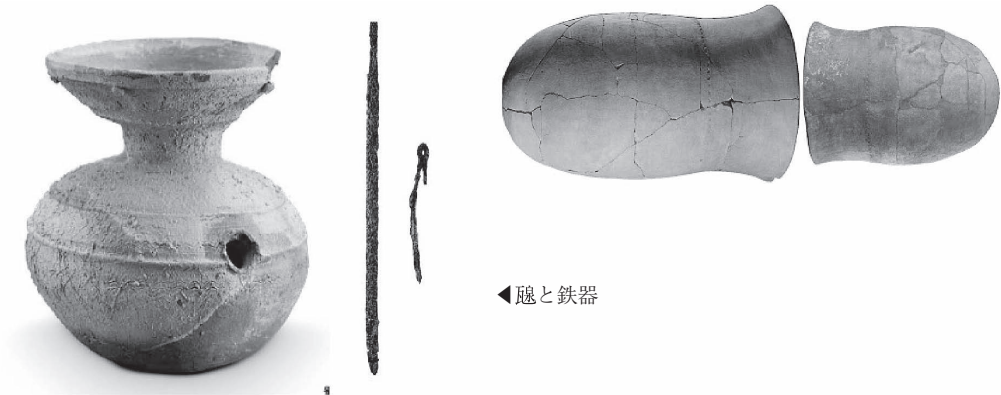


▲甗

図 17. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「発展期」の甕棺と甗（国立羅州文化財研究所 2012b）

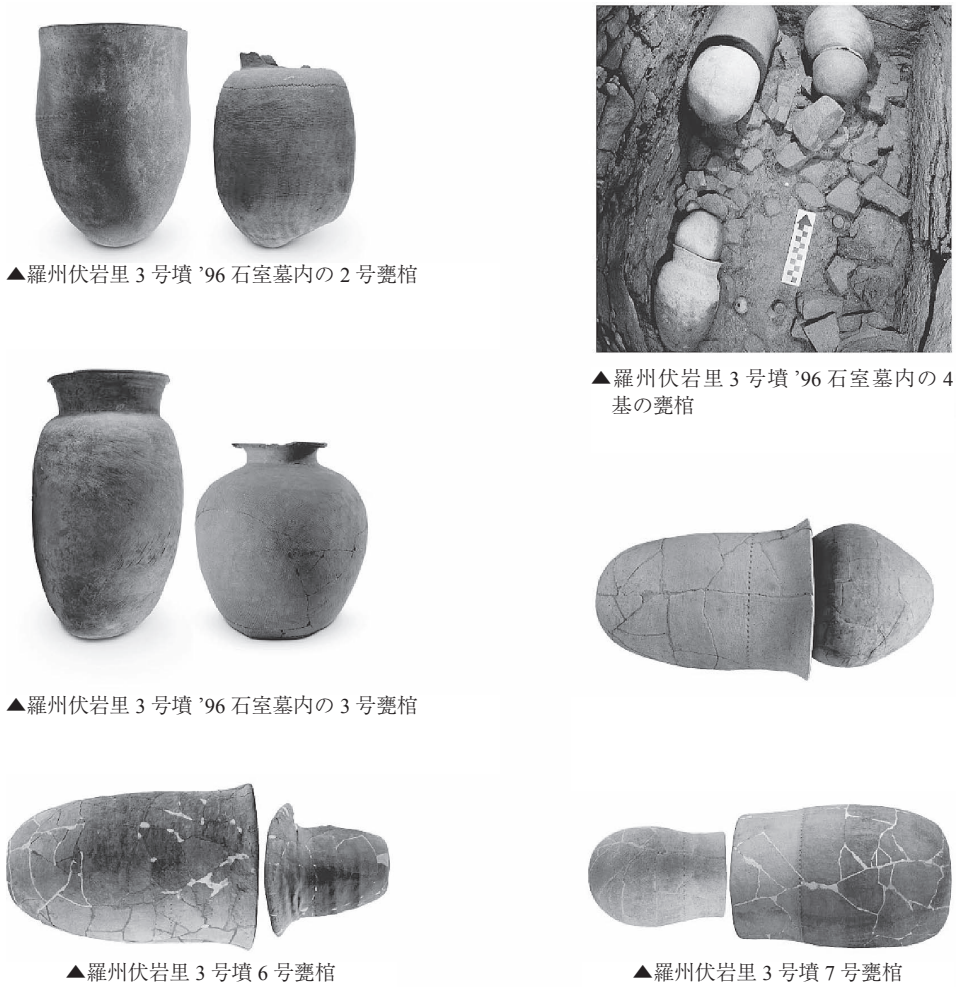
接近の試みは、まだ不十分である。また、大型甕棺の製作技法においても、科学的分析が併行されなかったため、資料解析に対する実際的なアプローチや検証作業は不十分であった。

このような問題点を解決するために、国立羅州文化財研究所では2008年から「大型甕棺製作の古代技術復元プロジェクト」を推進している。この作業は、大型甕棺製作の技術文化的側面の研究を通して、当時の社会文化に対するより直接的な接近を図ることを目的にしている。したがって、当時の技術環境の復元のために、従来の研究成果と甕棺の実際



◀ 甕と鉄器

図 18. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「盛期」の甕棺と副葬品（国立羅州文化財研究所 2012b）



▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 2 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 4 基の甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 3 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 6 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 7 号甕棺

図 19. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「衰退期」の甕棺（国立羅州文化財研究所 2012b）



図 20. 大型甕棺の焼成実験の風景と復元された甕棺 (国立羅州文化財研究所 2012b)

的観察（肉眼観察、3D スキャン、CT スキャン、X 線撮影）等の資料を確保かつ分析し、これを実験考古学的方法と自然科学的分析を通して交差検証作業を実施した。

まず、大型甕棺に対する実際の観察と発掘調査に基づいて、甕棺の成形、乾燥、移動、焼成実験などの一連の過程を模擬試験した（図 20）。また、その結果を参考して、甕棺復元のための一連の作業を五良洞窯跡の発掘調査、大型甕棺の成分分析、製作実験などの細部に分けて進行している。とくに、最近は大甕棺を焼成する窯に関する復元実験を中心にプロジェクトを進めている。

## 5. おわりに

栄山江流域の甕棺古墳は、独特な形態の大型専用甕棺を使用している点において、他の地域と差別化される。そのような点で、栄山江流域の甕棺古墳の墓制としての特性を明かすために、いろいろな調査と研究が行われてきた。最近では既存の甕棺古墳をより多角的に探究できる資料が発見されている。栄山江流域における古代社会の実態を明確にするため、今後の課題については以下のようにまとめられる。

### (1) 栄山江流域における古墳の築造過程についてはより精緻な検討が必要

最近、霊岩・沃野里方台形古墳（図 5）において分割盛土技法の墳丘築造方式が確認さ



れたことを始めとして、古代古墳の築造過程に関する新しい資料が確認されている。これをきっかけにして、古墳の築造過程から古代土木技術とともにそこに内在する社会経済的意味を明らかにさせる新たな契機が準備された。そして、羅州・伏岩里遺跡などでは、周溝の垂直あるいは水平拡張についての新しい資料が発見され、周溝内部で円筒形土器が大量に出土した古墳の構造と形態、築造方法についての新しい論議が必要になっている。

### (2) 甕棺と甕棺古墳の編年についてはより綿密な研究が必要

甕棺と甕棺古墳に関する編年研究は比較的活発に行われてきた。これまでの編年研究は、見解がほとんど一致しながらも、非常に大きい差を見せていた。たとえば、羅州・新村里9号墳(図13)の場合には、研究者によって4世紀後半から6世紀前半までの非常に多様な編年観が提示されている。この古墳は、潘南古墳群において中心的位置を占めているだけでなく、それと横穴式石室墳、そして前方後円墳との前後関係が、甕棺古墳社会に対する視角とともに、百済との関係設定にも相当な反響を呼び起こせるのである。したがって、甕棺と甕棺古墳の編年体系に関する精密な検討が必要である。

### (3) 栄山江流域における古代社会の構造と性格についての活発な論議が必要

これについては現在、大きく3つの方向で論議が行われている。1つ目は、栄山江流域の古代社会が統合した一つの政治体として発展したのか、それとも多数の小国形態として維持されたのかについての論争である。2つ目は、栄山江流域の古代社会と百済との関係設定に関する問題である。最後の3つ目は、栄山江流域の古代社会をどのように呼称するかという問題である。

### (4) 大型甕棺窯やその付帯施設の発掘調査、そして大型甕棺の観察および成分分析を通して、大型甕棺の流通網を究明し、大型甕棺の時期別・地域別特性と変遷過程を明らかにすることが必要

また、大型甕棺の供給方式、埋葬施設としての使用および廃棄に関する多角的な調査と研究を通して、甕棺を活用した古代の葬送儀礼を復元するべきである。そのためには、栄山江流域の大型甕棺窯と甕棺古墳に関する考古学的調査・研究・実験に基づいて、GISを活用した水系・道路網などの古代地形の研究を加えて、栄山江流域の甕棺古墳の立地と流通網を復元すべきである。

今後、栄山江流域における古代社会の構造と性格をより明かにするためには、考古学と他の関連分野間の融合研究が必要である。そして、従来の個別的な調査および研究を総合化することができる研究方法論が開発されるべきである。そのような多様な試みを通して、栄山江流域における甕棺古墳社会の実態により近づくことができるだろう。

参 考 文 献

- 姜鳳龍、1998、「5~6세기 영산강유역 ‘웅관고분사회’의 해체」、『백제의 지방통치』、한국상고사학회。  
 국립나주문화재연구소、2010、『羅州 伏岩里遺跡 I-1~3 차 발굴조사보고서』。  
 국립나주문화재연구소、2011a、「나주 복암리유적 6 차 발굴조사 약보고서」。  
 국립나주문화재연구소、2011b、『羅州 五良洞 窠址 I-1~4 차 발굴조사보고서』。  
 국립나주문화재연구소、2012a、『靈巖 沃野里 方台形古墳 제 1 호분 발굴조사보고서』。  
 국립나주문화재연구소、2012b、『웅관의 일생-가마에서 무덤까지-』 안내책자。  
 金洛中、2009、『영산강유역 고분연구』、학연문화사。  
 김낙중、2009、「영산강유역 정치체와 백제왕권의 관계변화」、『백제연구』 50、충남대학교 백제연구소。  
 盧重國、1987、「마한의 성립과 변천」、『마한. 백제문화』 50、원광대학교 마한. 백제문화연구소。  
 朴淳發、1998、「4~6세기 영산강유역의 동향」、『백제사상의 전쟁』 제9회 백제연구 국제학술대회、충남대학교 백제연구소。  
 박순발、2000、「백제의 南遷과 영산강유역 정치체의 재편」、『한국의 전방후원분』、충남대학교박물관。  
 朴天秀、2002、「梁山江流域における前方後円墳の出自と性格」、『考古学研究』 49-2、考古学研究会。  
 박천수、2006、「영산강유역 전방후원분을 통해 본 한반도와 일본열도」、『백제연구』 43、충남대학교 백제연구소。  
 徐賢珠、2007、「영산강유역 장고분의 특징과 출현배경」、『한국고대사연구』 47、한국고대사연구회。  
 成洛俊、1983、「영산강유역의 웅관묘 연구」、『백제문화』 15、공주대학교 백제연구소。  
 성낙준、1996、「영산강유역 웅관묘의 문화적 성격」、『백제연구』 26、충남대학교 백제연구소。  
 小栗明彦、2000、「전남지방출토 埴輪의 의의」、『백제연구』 32、충남대학교 백제연구소。  
 吳東燦、2008、「호남지역 웅관묘의 변천」、『호남고고학보』 30、호남고고학회。  
 오동선、2009、「나주 신촌리 9 호분의 축조과정과 연대 재고-나주 복암리 3 호분과의 비교 검토」、『한국고고학보』 73、한국고고학회。  
 李丙燾、1976、「근초고왕척경고」、『한국고대사연구』、박영사。  
 李基東、1987、「마한영역에서의 백제의 성장」、『마한. 백제문화』 10、원광대학교 마한. 백제문화연구소。  
 이기동、1996、「백제사회의 지역공동체와 국가권력」、『백제연구』 26、충남대학교 백제연구소。  
 李道學、1995、『백제고대국가연구』、일지사。  
 李暎澈、2001、『영산강유역 웅관묘사회의 구조 연구』、경북대학교 석사학위논문。  
 李正鎬、1996、「영산강유역 웅관묘의 분포와 변천과정」、『한국상고사학보』 22. 한국상고사학회。  
 이정호、2012、「영산강유역의 백제고분」、『백제고분의 새로운 인식』 2012년 호서. 호남고고학회 합동 학술대회、호서고고학회. 호남고고학회。  
 林永珍、1997a、「전남지역 석실분토분의 백제계통론 재고」、『호남고고학보』 6、호남고고학회。  
 임영진、1997b、「영산강유역 이형분구 고분소고」、『호남고고학보』 5、호남고고학회。  
 임영진、2002、「영산강유역권분구묘와 그 전개」、『호남고고학보』 16、호남고고학회。  
 임영진、2005、「영산강유역석실분토분의 성격」、『영산강유역 고대사회의 새로운 조명』、역사문화학회. 목포대학교박물관。  
 임영진、2010、「영산강유역 웅관묘사회의 연구사적 검토」、『웅관』、국립나주문화재연구소。  
 임영진、2011、「영산강유역권 분구묘의 특징과 몇가지 논쟁점」、『분구묘의 신지평』、전북대학교 고고문화인류학과 BK21 사업단 (ex-RTC) 국제학술대회、전북대 BK21 사업단。  
 임영진、2012、「고흥 吉頭里 雁洞고분의 발굴조사 성과」、『고흥 길두리 안동고분의 역사적 성격』、고흥 길두

- 리 안동고분 특별전 기념 학술대회, 전남대학교박물관.
- 朱甫暎、2000、「백제의 영산강유역 지배방식과 전방후원분 피장자의 성격」, 『한국의 전방후원분』, 충남고고학연구회 40주년기념논문집, 忠南考古学研究会.
- 최몽룡、1986、「고고학적측면에서 본 마한」, 『마한. 백제문화』 9, 원광대학교 마한. 백제문화연구소.
- 국립나주문화재연구소, 2010、「대형옹관제작 고대기술 복원 프로젝트」, 『移住의 고고학』 2010 제 34회 한국고고학전국대회 발표자료집.
- 성낙준、2000、「영산강유역 甕棺古墳의 성격」 『지방사와 지방문화』 3 권 1 호.
- 曹美順、2011、「제작실험을 통해 본 대형옹관 제작기법」 『제 4회 고대옹관연구 학술대회-실험고고학에서의 대형옹관 제작기법』, 국립나주문화재연구소.
- 田鏞昊、2012、「대형옹관 제작실험 연구의 성과와 과제」 『제 5회 고대옹관 국제학술심포지엄-대형옹관제작 복원 프로젝트의 성과와 전망』, 국립나주문화재연구소.
- 崔盛洛、1996、「전남지방에서 복합사회의 출현」, 『백제논총』 5.
- 최성락、2010、「영산강유역 고분의 연구-고분의 개념, 축조방법, 변천을 중심으로-」, 『호남고고학보』 33, 호남고고학회.
- 최성락、2012、「영산강유역 옹관고분사회의 성격과 과제」 『제 5회 고대옹관 국제학술심포지엄-대형옹관제작 복원 프로젝트의 성과와 전망』, 국립나주문화재연구소.
- 洪濬植、2005、「영산강유역 삼국시대 고분문화의 성격과 추이」, 『호남고고학보』 21, 호남고고학회.
- 常松幹雄、2010、「옹관묘의 분포와 그 배경」 『동아시아 옹관묘-일본편』, 국립나주문화재연구소.
- 堤隆、2000、「実験考古学」 『用語解説 現代考古学の方法と理論』 II, 同成社.
- 東潮、1995、「榮山江流域の墓韓」, 『展望考古学』 (考古学研究会 40周年記念論文集), 考古学研究会.
- 東潮、2001、「倭と榮山江流域 — 倭韓の前方後円墳をめぐる —」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.
- 山尾幸久、2001、「五、六世紀の日韓關係 — 韓國前方後円墳の一解釈」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.
- 岡内三眞、1996、「前方後円墳の築造モデル」, 『韓國の前方後円墳』, 雄山閣.
- 有光教一、1940、「羅州潘南面古墳の發掘調査」, 『昭和十三年度古蹟調査報告』 朝鮮古蹟研究会.
- 朝鮮總督府編、1920、『大正六年度古蹟調査報告』.
- 土生田純之、1996、「朝鮮半島の前方向後円墳」, 『専修大学人文科学研究年報』 26, 専修大学人文科学研究所.
- 土生田純之、2008、「前方向後円墳をめぐる韓と倭」, 『古代日本の異文化交流』, 勉誠出版.
- 柳澤一男、2001、「全南地方の榮山江横穴式石室の系譜と前方後円墳」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.